

ことばの教室担当教諭への専門的研修が指導に与える効果

柴本 勇^{*,1)}、今明 薫²⁾

¹⁾聖隷クリストファー大学、²⁾浜松市教育委員会

【目的】

浜松市には、小学校が 97 校、中学校 49 校がある。このうち、言語に関係する発達支援を行う教室として 10 校に設置している。浜松市の場合、発達支援として「幼児ことばの教室」と「通級指導教室(言語)」の 2 つがあり、前者は就学前幼児を対象とし、後者は学童児童を対象としている。幼児ことばの教室と通級指導教室(言語)を、通常「ことばの教室」として表し、各都道府県や市町村では支援拠点学校に教室が設置されている。

幼児ことばの教室は、1 週間に 1 回程度小学校に設置された専門教室に通い、専任教諭から個別指導(45 分程度)を受けるものである。個別指導は、対象児の状態に応じ、個別に言語指導、発音指導を実施する。必要に応じて、集団(グループ)指導も実施する。個別指導以外には、家庭との連携を図り、指導の成果をあげるために、個別面談や保護者研修会も実施している。対象は、①ことばの発達が遅い、②構音が正確でない、③流暢に話せない児である。

通級指導教室(言語)は、1 週間に 1 回程度決められた時間に通級指導教室に通い、45 分程度の指導を受ける。指導は、専任教諭によって、個別指導と保護者支援が行われる。個別指導では、個々の課題に応じた指導で、必要に応じて集団(グループ)指導も取り入れられている。また、家庭との連携を図りながら個別指導効果を高める活動もしている。対象は、①ことばの発達が遅い、②構音が正確でない、③流暢に話せない児である。

幼児ことばの教室、通級指導教室(言語)共に、対象や運営は同じであるが、言語は幼児期と学童期では獲得すべき内容や目標が異なるため、浜松市ではそれぞれの専門性を重視し別々の運営をしている。

更に、幼児ことばの教室や通級指導教室(言語)を担当する教諭は、就学相談や就学判定にも関わっており、専門性の高い活動を実施している。

しかし、浜松市においては通級指導教室(言語)の場合は専任教諭を常勤雇用しているものの、幼児ことばの教室の担当教諭は非常勤でかつ 5 年間の有期雇用となっている課題がある。同時に、「言語聴覚障害」を専門としてきた教諭が少なく、ことばの教室の担当教諭は専任となった段階で独自に学び始めるなど各自の努力に委ねられていることが多い。更には、研修会が開催されてはいるものの、系統的専門研修は少なく現状では専門教育を十分に受けられる環境が乏しい。各校の専任教員数は数名であり、専門教育の機会があったとしても、平日では全員受講できないという側面もある。

本研究では、現在ことばの教室を担当する専任教諭が抱える課題である、系統的専門研修を受ける機会を与えること、加えて系統的専門研修がそれぞれの指導に与える効果について検討した。

本研究の特色は、これまで個々の努力に任せられていた学修を専門的かつ段階的に積み上げることで、将来の浜松市教育委員会の研修や本学が専門研修を提供する際の、基礎的データを得ることができる点である。

【方法】

浜松市内の幼児ことばの教室、通級指導教室(言語)で、言語指導をしている教諭を対象とした。以下に示す 5 回の系統的専門研修を実施し、研修受講前後の指導方法や指導内容について調査した。

①系統的専門研修内容

第1回：2018年1月20日（土）13:30～15:30

『子どもの言語・コミュニケーションの発達（1）』

「言語やコミュニケーションとは」、「言語コミュニケーション発達の基盤」など典型発達過程を前言語期まで講義する。

第2回：2018年2月3日（土）13:30～15:30

『子どもの言語・コミュニケーションの発達（2）』

学童期の発達までを講義する。

第3回：2018年2月17日（土）13:30～15:30

『言語発達障害の種類や様相』

子どもの典型発達を踏まえた上で、言語発達障害について講義する。

第4回：2018年3月3日（土）13:30～15:30

『言語発達障害児の評価・支援（1）』

評価について、支援について、それぞれの基本的考えや臨床での手順といった基礎的な内容を講義する。

第5回：2018年3月10日（土）13:30～15:30

『言語発達障害児の評価・支援（2）』

実際の事例や教科書に出ている事例などを通じて、評価や支援方法について講義する。

②研修講師

遠藤重典氏（言語聴覚士：児童発達支援センターほうあんうみ、小田原市）

a. 略歴

- ・東京学芸大学教育学部特殊教育学科言語障害児教育課程卒業
- ・東京学芸大学大学院教育学研究科総合教育開発専攻教育カウンセリングコース修了（教育学修士）
- ・国際医療福祉大学クリニック言語聴覚センター講師
- ・国際医療福祉大学 講師を経て現在に至る

b. 専門

- ・発達障害児の言語・コミュニケーション指導
- ・子どもの発達促進を目指した関連職種との連携

③指導に関する調査

- a. 研修の重要性に関する調査
- b. 指導方法に関する意識調査
- c. 指導上の悩みの相談相手に関する調査
- d. 指導上必要なことに関する調査
- e. 言語聴覚士との活動に関する調査
- f. 浜松市教育委員会との活動に関する調査

【結果】

①専門的研修

a. 参加人数

第1回：46名、第2回：35名、第3回：32名、第4回：38名、第5回：30名

b. 研修内容

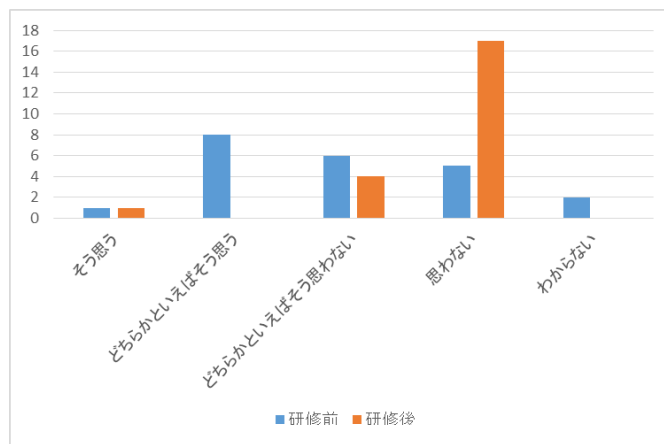
当初計画したとおりの内容を実施した。毎回、多くの質問等が挙がり活発な議論が実施された。



【言語発達障害研修会の様子：聖隷クリストファー大学】

②指導に関する調査（N=22）

a. 専門研修



【Q. 専門的研修を受けなくても指導に支障はないですか？】

b. 指導方法に関する意識調査

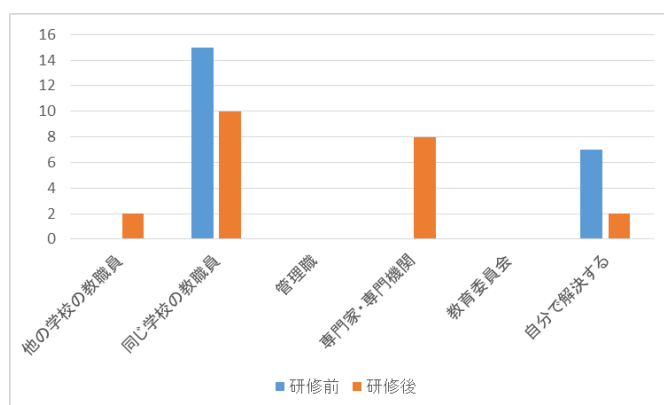
【研修前】上位4つ

- ・十分な指導準備をする
- ・熱意を持って取り組む
- ・子どもに愛情を持って取り組む
- ・保護者と良好な関係を築く

【研修後】上位4つ

- ・熱意を持って取り組む
- ・教員として必要な経験を積む
- ・子どもをよく理解する
- ・専門教員として自信をもって職務にあたる

c. 指導上の相談相手



d. 指導上必要なこと

【研修前】上位4つ

- ・自身への専門的サポート
- ・勉強会の開催
- ・保護者への指導法
- ・児童へのチューター

【研修後】上位3つ

- ・自身への専門的サポート
- ・検討会の開催
- ・指導機器（用具）の充実
- ・言語発達も含めたトータルな指導

e. 言語聴覚士との活動

- ・ことばの教室への定期的訪問指導の実現
- ・専門的相談窓口の開設
- ・医療と教育の連携（同じお子さんを指導することが多い）
- ・コミュニケーションの専門家として地域の子どもたちへの積極的支援を期待している
- ・具体的指導方法の支援・相談・教授

- ・定期的な事例検討会の開催
- ・ことばの教室教諭と言語聴覚士の協力体制の構築
- ・異常構音の聞き分けについてのチュートリアル
- ・教育分野で行えるスクリーニングテストの開発

f. 浜松市教育委員会との活動

- ・発達全体を捉える必要性を感じた。専門研修の内容を再検討
- ・研修回数の増加（今回のような5回シリーズの系統的研修）
- ・事例検討会の増加と他職種の参画
- ・ことばの教室設置校の増加
- ・コミュニケーションや言語に関する総合的相談センターの設置
- ・系統的初期研修の新設と定例化

【考察・結論】

現在浜松市においては就学前や修学後に「ことばの障害」を専門に評価・治療する医療・福祉施設が少ないのが現状である。そのため、小学校に設置されていることばの教室は、通級する児の教育や生活、コミュニケーションを保障する重要な役割を持つ。一般的に、ことばの障害で通級指導を受ける児は増加の一途を辿っていることが指摘されている。ことばの障害を抱える児の中には、「いじめ」や「不登校」に至るケースがあり、早期からの指導や連携の重要性が指摘されている。そのような状況にも関わらず、経験の少ない教諭が言語障害の通級指導を担当するケースがあり、担当となった教諭が不安を抱くこともある。

本研究では、浜松市内の小中学校に勤務する教諭に、「ことばの障害」及びその指導の原則を学んでもらうことが自身の指導にどのような効果や影響をもたらしたかを調査した。全5回の系統的専門研修を行いその前後での指導等に関する調査を実施した。その結果、専門研修の有用性については、受講前には専門研修を受けなくても指導に支障がないと考えていた教諭が、研修後に研修を受けなければ指導に支障があると答えるなど、心境が変化した人数が増加した。また、自身の指導方法については、子どもや保護者との関係性を重要視していたところから、しっかり子どもの状況を理解した上で職務に当たることが重要であるとの考えに変化するケースが多かった。指導上の相談相手については、教諭同士や自身で解決する考え方から、専門職・専門機関や他学校の教諭にも相談しようという考え方へと変化した。指導上必要なことについては、自身のレベルアップからより多角的な視点や指導器具の充実など対象児にとって重要なことは何かという視点へと変化した。言語聴覚士に望むことは、互いの連携の重要性を挙げる教諭が多くなり、浜松市教育委員会へは研修の充実や相談センターの設置などを期待する声が高まった。

今回、浜松市においてことばの教室の教諭向けの系統的研修は初めてであった。担当教諭は40名強であるが、毎回の研修会には30名以上参加を得た。高い関心の裏には、系統的専門研修の潜在的ニーズがあると考えられた。

本地域貢献事業研究の実施から、言語聴覚士の専門性をよりことばの教室の教諭に理解してもらうことができ、またことばの教室の教諭の現状を知ることができた。今後も系統的研修の継続を望む意見が多く、地域の子どもを支える活動として互いに協力して系統的研修の継続が望まれる。将来的には、浜松市教育委員会に言語聴覚士が雇用され、常に学校レベルで適切なサポートができる体制を構築することが期待される。

【学会発表・論文発表の状況】

2018年度に本学紀要に投稿予定である。